

## 日本ダルクの取り組み

日本ダルク本部  
近藤 恒夫

欧米の治療共同体をモデルにした回復者主導型施設ダルクが突如誕生したことは行き詰まりの日本の薬物政策に対しインパクトを与えることになった。薬物依存者の当事者活動によって、「覚せい剤中毒者」「ヤク中」と軽視されてきた人たちが、回復の主体としての「薬物依存者」と名乗りはじめ、その概念が多くの当事者や医療関係者に広がっていくことになり、薬物問題の概念を見直すきっかけを与えたといっても過言ではない。

一方、医療、司法、行政はダルクの当事者活動の位置づけに戸惑い、どの機関も一定の距離を取らざるを得なかったため、結果的にどこの組織の影響も受けることなく、当事者のスタンスが守れたことは幸いであった。

ダルクはAA（アルコールクス・アノニマス）の12ステップ・プログラムを基礎にしている。組織が拡大し、新たなダルクが誕生しても緩やかな「連携」にとどめ、各施設の独自性を重視する方針をとってきた。この緩やかな組織形態は、それぞれの施設が活動を展開する地域の状況に合わせて、そのあり方を模索することとなり、結果的にプログラムに柔軟性と多様性を生み出させることになったのである。

1994年より社会問題化した第3次覚せい剤乱用問題で未成年を中心とした薬物乱用が広がった頃から、ダルクの社会的認知が広がった。それは学校の教育現場からのニーズが増え、教育現場が当事者の体験の重要性に着目したことで、地域の社会資源としての存在が注目されるようになったのである。

現在ダルクの活動は多方面にわたっており、その整理が必要な時期になりつつある。現在のダルクの活動をあげてみると下記のようなになる。

### 「社会的意義」

1. 当事者活動 NGO
2. 一般市民への薬物問題のTV・ラジオによる啓発
3. 社会的損失減少

### 「医学的意義」

1. 薬物依存の治療共同体モデルとしての実験的試み
2. 薬物依存リハビリテーション問題の情報拠点
3. 初期介入システムとしての機能
4. 回復者カウンセラーへの注目

「司法的意義」

1. ダイバージョン（非犯罪化）への注目
2. 薬物事犯の弁護支援
3. 出所後のケア・プログラム
4. 薬物の需要の減少
5. 依存者の社会的処遇プログラム
6. 各刑務所の受刑者に対する再犯防止教育への参加・指導

「福祉的意義」

1. 社会復帰支援
2. 精神保健の相談支援
3. 地域ネットワーク作り

「教育的意義」

1. 学校（小学校・中学校・高等学校・大学）の予防教育支援
2. 教員への講演活動

「国際協力」

1. フィリピンにおける貧困層の薬物依存者への草の根支援プロジェクト参加  
【JICA（国際協力機構）との共同事業】
2. 韓国・麻薬退治センターへの協力

国際協力として今年5月から始まった JICA（国際協力機構）のフィリピンにおける貧困層の薬物依存者への草の根支援プロジェクトにもダルクのメンバーが参加している。ダルクのプログラムは単に薬物使用を止めることを目標としておらず、人間性の回復を目指している。それによってアディクションの世代連鎖を防ぐことで将来的損失の防止にも役に立つ。

当事者が始めた NGO（非政府組織）がこのような本来ダルクが負うべきではない社会的な役割も持つことになったのである。

## ダイバーション（非犯罪化・代替的治療措置）

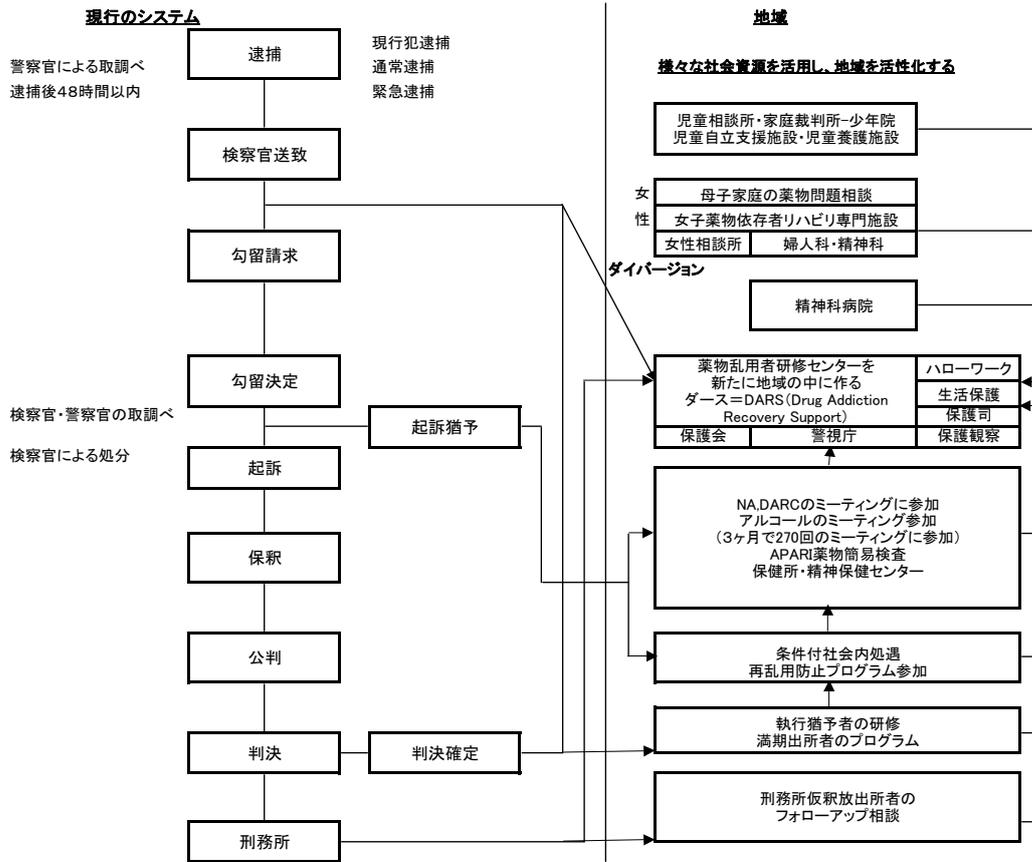


図 1

## ダルクの役割とネットワーク

